

かも 市史だより

令和5年12月
No.47

◆編集発行 加茂市幸町二丁目3番5号 加茂市教育委員会内市史編さん室 ☎0256(52)0080 内線480



▲花立遺跡の建物（南から）令和4年調査



▲中沢遺跡の建物（南から）平成13年調査



▲馬越遺跡の建物（南から）平成10年調査

古代の大型掘立柱建物跡

奈良・平安時代の遺跡を調査すると、掘立柱建物が多く見つかります。建物の性格や用途を考える上で、大きさ（平面積）が一つの指標となります。建物の平面積は、梁間（短辺）の長さ×桁行（長辺）の長さで求めます。これまでに発掘調査された市内の三遺跡の中で、最大規模の建物を紹介します。

一つは馬越遺跡で、二間（約五・七m）×四間（約九・〇m）、平面積約五一㎡の建物が最大です。また、中沢遺跡でも、二間（約五・六m）×五間（約九・二m）、平面積約五二㎡以上と馬越遺跡と同等規模の建物が調査されています。近年、調査された花立遺跡では、二間（約五・八m）×四間（約七・八m）で平面積約四五㎡以上の建物が発見されています。

いずれの建物も南北に主軸を向け、柱穴もほかの建物に比べて大きく作られています。このことから、平面積五〇㎡前後の規模の建物が、集落の中心的建物として存在したことが推測できます。

馬越遺跡、中沢遺跡、花立遺跡はともに地域の有力者が関与して開発が行われた集落であり、建物の最大規模が類似することは遺跡の性格を考える上でとても重要です。

（市史編さん室 伊藤秀和）



早田文蔵*

台湾植物学の父・早田文蔵

加茂町出身の世界的植物分類学者



先頃、NHKの朝ドラ「らんま
ん」で、主人公のモデルとなった植
物学者・牧野富太郎（一八六二～
一九五七）が一躍脚光を浴びたのは、
記憶に新しいところ。

牧野富太郎が「日本植物学の父」
ならば、同時期に東京帝国大学植物
学教室に在籍し、後に第三代東大附
属植物園（小石川植物園）園長となっ
た加茂町出身の早田文蔵は、「台湾
植物学の父」と呼ばれています。

早田は明治三十八年（一九〇五）、
台湾総督府の要請で台湾へ、以後
十九年に渡って台湾植物の調査・研
究に打ち込みました。またこの間、
台湾総督府の援助を得て仏領インド
シナ、ベトナム、ラオス、タイ、中
国雲南など東南アジア各地を巡って
植物調査を行いました。
こうして採集し、命名・発表した



▶七十余年ぶりに台北植物園内に復
元された早田文蔵の記念碑
(松坂町湯澤利明氏撮影)

植物の学名数は、牧野富太郎の一五
〇〇種余りを凌ぐ一六〇〇種に上り
ました。特にタイワンスギの命名は
世界が目撃し、『台湾植物図譜』（全
一〇巻）を著すなど、台湾と世界の
植物学に多大な功績を残しました。

総督府はその功績を称え、早田没
後の昭和十一年（一九三六）、台北植
物園に早田の記念碑を建立しました
が、太平洋戦争末期に消失しました。

平成二十九年九月、台北植物園で
は早田の胸像レリーフを据えた記念
碑を七十余年ぶりに復元し、除幕式
が開催されました。式典には早田の
孫で札幌医大名誉教授・秋山盛男さ
んと大阪国際大名誉教授・谷口正子
さんが招かれ出席しました。

早田文蔵は、牧野より十二歳年下、
明治七年、加茂町上町の早田新吉の
二男として生まれました。六歳のと
きに父が亡くなり、母と祖父母に育
てられました。加茂尋常小学校から
私立長岡学校（現県立長岡高校）に
入学するも家業の都合で中退。祖父
の仕事を手伝い、織物などを運んで
いました。

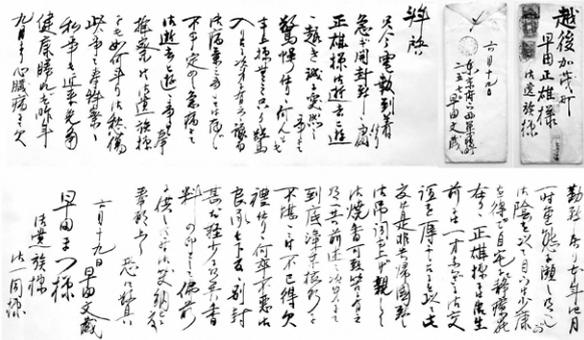
祖父の引く荷車を押して村松町
（五泉市）まで尾登峠（大登峠）を
越えていくのですが、珍しい植物を

見つけては山中に駆け込んでしまい、
祖父を困らせていたとか（『広報か
も』昭和61・9・15）。

その後、祖父母を相次いで亡くし
た文蔵は、植物学を志し明治二十八
年、親戚の援助を得て二十一歳にし
て上京、郁文館中学（東京都文京
区）に入学します。翌年には母も亡
くし、東京で身を立てると決意。そ
して東京帝大、同大学院に進み植物
学に没頭することが出来たのも、郷
里でそれを支えた実家と親戚の支援
があつてこそでしょう。

大正九年（一九一〇）には、台湾
植物研究の功績が認められ、現在の
日本学士院賞にあたる「桂公爵記念
賞」を受賞。

東京帝大教授となり一層研究に邁



▲文蔵が早田まつに宛てた手紙 昭和5年6月(上町 早田芳男氏所蔵)

◀加茂市立図書館で開催の早田文蔵特別展
昭和三十一年頃。右下には同四年頃、
東大教授佐竹義輔撮影の、早田と牧
野が植物学教室前で語らう様子をと
らえた写真がみえる。



進する文蔵でしたが、昭和四年、心
臓病で倒れます。

翌五年に、文蔵が親戚である上町
早田芳男氏の祖父正雄の逝去に際し、
祖母まつ（文蔵の従妹にあたる）に
宛てた一通の手紙が残されています。

正雄は太田村（燕市）から婿入り、
加茂製材株式会社（現加茂）の支
店長として務めました。文面から
窺えるように、正雄もまた文蔵を支
援していたことは、芳男氏も祖母まつ
から聞いていたそうです。文蔵が、自
分より四歳年下の正雄の急逝に驚愕
し、自身もまた病のため葬儀に駆けつ
けられない無念さが伝わります。

同年英国で開催の万国植物学会議
で、文蔵には副会長の椅子が用意さ
れていました。しかし病のため出席
叶わず。四年後の昭和九年、文蔵は
五十九歳、志半ばで他界しました。

《参考文献》大場秀章『早田文蔵』
(近現代部会 齋藤 淳)

終戦後の農民の暮らしを取材した『農民新聞』

戦後の日本を統治した総司令部（GHQ）は、続々と創刊される新聞・雑誌等を集め、検閲制度を敷きました。ここでは、検閲で押収され、米国のメリーランド大学に保存される資料から、須田村北潟で発行された『農民新聞』に注目します。

『農民新聞』の創刊

『農民新聞』は、昭和二十一年（一九四六）四月十六日付の第三号から残っています。取材対象は須田村を含む白根郷を中心に、市域と中蒲原郡・南蒲原郡全体におよびました。

記事では各地の農民組合の集会報告、農地解放の進捗を左右した農地委員の選挙結果など、組合の機関紙の性格が窺えます。合わせて、集落を単位に細かく取材し、女性や青年、政治や医療の動向など生活全般を扱いました。

創刊時は毎月六回の発行でしたが、一〇号では月三回、二〇号以降では月二回になりました。発行部数も当初の二〇〇〇部から二十四年には一〇〇〇部に減少しています。部数や発行頻度の変化は、終戦後、GHQが農地解放を中心に農村の民主化を進める中で農民が世情の動向へ急激に敏感になり、やがて落ち着いていった経緯を示唆しています。

発行者伊藤安宅の人物像

本紙の編集・発行と主幹を担った

のは、伊藤安宅でした。北潟には戦前から空き家となっていた住宅があり、須田小学校の教員が入れ替わり住んでいました。教員が退去して、再び空き家となっていた住宅に伊藤は一時期家族で暮らしていました。

伊藤安宅は、明治二十七年（一八九四）頃対馬（長崎県）に生まれ、大正四年頃に上京し東京や水戸市や福島市などで新聞や雑誌記者として活躍したと思われます。キリスト教信者で、昭和四年に『蘇りしイエスの証人』という生い立ちからキリスト教への入信、布教活動についてまとめた著書もあります。その後東京へ戻り、昭和四年、八年、十五年は豊島区に在住していたことが確認できます。伊藤は疎開などの理由で県外から須田村北潟へ移り、敗戦を機に農村部特有の事情に着目し、言論活動に動いたのではないのでしょうか。

農民組合の再編

大正期（一九二二～二六）を中心に、地主へ小作人の権利を要求する

國体の力で農具修理

増産研究に熱見せる加藤農組

加茂町農民組合は去る二月早くも結成を見、組合長に有本甚作、長谷川長司の兩氏、幹事長に坂内寅吉氏の就任を見、經濟部、副業増産指導部、青年部、婦人部を設け、事業として鎌鋏等の修繕が高價であり食糧等の要求があるので組合として團体的に一括修理をする事に成功し、また新潟鐵工の未利用地開放を工場に交渉して田畑を復活耕作する等積極的な活動振りを見せ、更に各支部主催の下に月例増産研究会を開催してあるが、此の貴重な研究は今秋研究発表會を開いて組合員の増産意欲を盛上げようといふ意欲で最近益々盛況を呈してゐる。この催しを

指導してゐるのは指導部長の佐藤發策氏でその努力は全組合員から感謝的となつてゐる。同組合は矢立、岡ノ町、石川、魁陣ヶ峰、上八幡、下八幡、本地上條、神明、狼毛、乳倉子、芦ノ出、元狹口、大袋、十字堀、諏訪ノ木、仲組の十八部落から成る活潑な組合陣である。有本組合長は元町會議員、現農業會理事の職にあり、小作争議の頃は組合長として陣頭に立つた人氏の居村矢立農民組合は日農支部として全國的な農民運動の一翼として活躍されてゐる。

『農民新聞』昭和二十一年十月十五日付の記事（国立国会図書館提供）

ため、日本農民組合（日農）が指導して各地に農民組合ができました。市域では、大正十三年（一九二四）に下条、十四年に矢立新田・岡ノ町で支部が組織されています（『近現代』三三〇）。活動は戦後再び活性化し、二十一年二月に日本農民組合が再結成すると加茂郷農民組合も再編されていきました。

本紙も再編から間もない加茂郷農民組合を取り上げ、鎌・鋏等の修理を組合が一括して請け負ったこと、戦争中に新潟鐵工所加茂工場（千刈）

に接收された未利用地を農地として解放するよう交渉したことなどを報じています（昭和21・7・21）。この時期の組合長は、矢立新田の農家で、日農が発足した頃から農民運動に力を尽くした有本甚作（一九〇九～八九）です（本紙第四二号）。有本らの組合員は、食糧が足りず米を半ば強制的に供出する社会的な要請もあり、団結をして耕作地の確保を図ったことがわかります。

（近現代部会 勝本幹夫）

中学校が荒れていた時代

昭和五十年代
平成十年頃

先日、所用で地元の中学校を訪問した。廊下で行き交う生徒達は「こんにちは」と明るく挨拶してくれた。私が若宮中学校に赴任した平成六年（一九九四）前後は、中学校は荒れていた。あれは一体何だったんだろう。

学校が荒れているとは

荒れた生徒がいること。つまり教師や親の指導を拒否して、自由気ままに行動している、いわゆるツツパリの生徒がいること。その生徒達は、深夜徘徊を繰り返して、寝不足と空腹で顔色が悪く、イライラして目付きが鋭くなっていた。

学校には、いつの間にか登校し、



▲ 若宮中学校の校舎 昭和62年（1987）竣工

物陰や屋上など教師の目の届かない所に屯していた。時には、体育館や空き教室に入り込んで遊んだり、騒いだりしていた。

学校としては、他の生徒や校舎物品に被害がないよう、彼らの行動に対応しなければならなかった。

学校間を交流する生徒

荒れた生徒は、どの中学校にもいた。もちろん大多数の生徒は授業にも、部活動にも真剣に取り組んでいた。ほんの数人が教室に入らずに騒いでいた。

生徒達は、自分たちだけでは時間を持って余しては、近隣の学校に遊びに行った。若宮中にも度々他校生が来た。「見たことのない女生徒が三階にいるよ」「S中の生徒でした」など。

他校の生徒を見ると、職員は「校長先生に挨拶したの」と声を掛けるらしく、校長室に挨拶に来るようになった。「何校の何さん」と聞いて、「長居をする」と、貴方の学校の先生

が心配して、警察に捜索願を出すかもしれないよ。三十分くらいで帰りなさい」と言うことにしていた。

ある日、三条第三中学校の生徒が遊びに来た。「校長先生、背小さいよね。うちの校長もうちと大きいよ。タバコも吸うよ」などと話していった。そこで、第三中のT校長に「貴方の愛児が来ているよ」と電話した。「そうか、道理で今日は静かだと思った。可愛がってやって」とT校長さんらしい返事だった。T校長さんは、後年、加茂市教育長として活躍された。

プールにスカートの花

六月のある日、校庭に女生徒のスカートが干してあった。聞くと、日当たりに屯していた生徒達は、暑さに耐えきれずプールに飛び込んだという。ジャージに着替えて、濡れたスカートを干しているとのこと。

プールには簡単に入れないように施錠がしてある。それを乗り越えて入ったらしい。その後は、教頭さんが「鍵を借りに来なさい」と声を掛けたらしく、鍵を借りていた。「返す時は、有り難うと言ってもらえると嬉しいね」などと言っていた。

プールの時期外使用は問題だが、それをきっかけに会話ができるのはありがたいこと。他校では、プールにガラスビンが投げ込まれたなどの話も聞いたが、若宮中の生徒はプール

を大事にしてくれた。

K中学校の暴力事件

市内中学校長会では、各校の荒れた生徒の状況をいつも報告し合っていた。顔は知らないが、名前や環境、行動特性などはお互い承知して対応出来るようにしていた。

そんなある校長会の途中、K校長に電話が掛かってきた。「悪いがすぐ帰らせて」という。聞くと職員と生徒が衝突をして怪我人が出ていたとのこと。K校長に私も同行した。

玄関に入ると、扉は破られガラスが散乱していた。二人の生徒がバットを構え、男子教員たちと睨みあっていた。どちらにも引くに引けない状況のようだった。

そんな時は、第三者が入ると良いと聞いていたので、校長の了解を得て、二人を私が預かった。初対面だったが、二人の名前も生活環境も聞いていた。割烹鴨川さんへ連れて行って昼食を食べさせた。両手ともガラスで切って血が吹いていた。鴨川の女将さんが、綺麗に消毒して、薬を付け包帯まで巻いてくださった。

今日はもう帰宅するよう勧めたが、チャリ（自転車）を取りに学校に戻ると言い張るので、また車に乗せてK中に行った。

行って驚いた。玄関前に数人の警察官がいて、私の車を見るや、「そ



▲若宮中学校の生徒たち（平成7年、若宮中学校創立40周年記念誌『はばたけ未来へ』より）

の車こつちへ来い」と怒鳴っていた。結局二人は、器物損壊と傷害で逮捕され、パトカーに乗せられて行った。後日、若宮中の荒れた生徒から、「警察に連絡したのは校長先生なん？」と聞かれた。「まさか、何で」と聞くと、「校長先生の車、マイク付いていてパトカーと同じだ」と。そうか、当時私はハム（アマチュア無線）をやっていた。ハムを知らない生徒は、私が通報したとおもったらしい。

学校の対応

当時の若宮中学校には、教師の指導を拒むツッパリが数人いた。またその影響を受けそうな生徒も数人いた。そこで、学校として、授業や部活動は正常に実施し、意欲を持ってい

る生徒の期待に応えること。荒れた生徒の影響を受けそうな生徒には、面談を重ねて、中学校時代の大事なことを自覚させること。ツッパリの生徒にも、対決ではなく言葉を交わして、一対一の信頼関係を築くことなどを全職員が同一歩調で、指導に当たった。ツッパリの生徒と対話を重ね、学校の教育活動に参加させ、何としても学校を正常化するのだという意欲に燃えていた。

昼夜をいとわぬ勤務だったが、有り難いことに休養する職員が出なかった。事務職員や養護教諭は、まだ若く、ツッパリの生徒がさぞ怖かったろうと思うが、良く勤めてくれたと感謝している。

荒れたA君が部活動に復帰

ある日、A君が校長室に遊びに来た。「今度の市内陸上でカップ一つ獲ってやるよ。俺、足速いんさ」「有り難う。でも無理じゃない。君は練習しない、夜寝ない、ご飯食べない、タバコで息が上がるだろ。相手は、栄養摂って、練習して、夜はぐっすり眠って体力十分だよ」。すると、俺も練習すると言って帰った。

数日後、A君が陸上部に入ったと話を聞いた。陸上部の顧問は、部員が悪影響を受けると拒否したが、三学年部の先生方が、どうしても頼み込んだとのこと。

心配になって、市宮陸上競技場に見に行った。練習が終わったところだったが、他の部員に混じって整列し、「有り難うございました」とグラウンドに一礼していた。その後もスパイクの泥落としや用具片付けをしていた。市内陸上大会では、四百メートルリレーのアンカーとして出場し、約束通り優勝カップを獲得してくれた。

中越大会出場権を得たA君は、練習に励んだ。顧問は、「中越大会はタバコ止めたぐらいじゃダメ、茶髪もピアスも禁止だよ」と茶髪もピアスも止めさせた。

中越大会から帰ってきたA君は「俺より茶髪の奴がいた。顧問に騙された」と怒っていた。顧問は「良い思い出になったじゃない」と飄々としていた。

荒れた生徒のその後

荒れていた生徒達も、各学校の先方、保護者、PTAの働きかけで、徐々に落ち着いていった。若宮中も部活動から体育祭、合唱コンクール、文化祭等に参加するようになり、心配した卒業式にも参加した。

しかし、この生徒達の進路は担任の一番の苦労だった。授業に参加していないので、普通高校進学は無理だった。事情を知っている各種学校や、自営業者などの協力を頂いて卒業していった。

卒業後は、素直に成長した人、暴走族に入った人、少年院のお世話になった人と様々。さまざま青春の時代に、身体を張って精一杯自己主張をした生徒達。現在は四十歳代、家庭を持ち穏やかに暮らしている。

学校では、荒れた生徒が、次の学年に引き継がれることを心配した。しかし、有り難いことに若宮中では、その生徒達だけで荒れた時代は終わった。教職員は、どんな事態にも対応してくれた。知力と人間性の限りを尽くした対応のお陰だった。

当時はなぜ生徒が荒れたのか

中学生時代は、人間の成長過程の中で最も自立心の育まれる時期である。いわゆるストームエイジ（嵐の時代）である。自分を規制する者には極めて強く反発する。そこに中学生指導の難しさがある。

しかし、この時代だけ全国的に荒れた。極端に荒れた。何が原因だったのか。ある人はテレビ番組の「三年B組」の放映の影響だという。ある人は、第二の団塊の世代だったからと言う。

欧米諸国も、同時代にドロップアウト（学校にこない生徒）が教育界の大きな問題になっていた。

（元加茂市立若宮中学校長・元保護司 金澤理久夫）

神社の変遷 江戸から明治へ

「神武創業」以来の古代王政に復古する立場をめざした明治新政府は、明治元年（一八六八）神祇官をおき、従来の神仏習合を禁じて神仏分離令を出しました。明治三年には神道を広めるため大教宣布の詔を発し、さらに神社を序列化しました。その中で神社は大きな変化を遂げていきます。ここでは七谷郷を例にこの間の変化をみていきたいと思います。

寛延三年（一七五〇）の「上下川社地・堂地村預由緒年数改帳」（『古代・中世』参考6）によると、七谷郷一一村の神社は三一社（寺内鎮守は除く）を数え、宮守や鍵取ともよばれた百姓身分の者か村全体、または村の寺院が管理していました。神事や祭礼は、上野村（五泉市）の八幡宮神主の藤田氏や村の寺院が奉祭していました。管理者と奉祭者別の組合せ（表参照）はA～Fの六通り見られます。管理者別では宮守が二四社（A～C）と最も多く、奉祭者別では神主の藤田氏が二〇社（A、E、F）と最多ですが、寺院も一〇社（B、D）を数え、僧侶が神前読経を行う神仏習合の様子が見られます。

また社地面積は、平均一二四坪

（宮寄上村山王大権現の五四四坪が最大）で、一〇〇坪以下は一九社でした。中には神木だけを祭る三か所の神社（黒水村の下諏訪と上高柳村の二か所ある十二権現）もあり、古

くからの自然信仰の姿を留めています。とりわけ下諏訪は社地もなく、神木だけの神社でした。建物で本社と拝殿を備えた神社は、黒水村と下高柳村のそれぞれの鎮守である山王大権現だけで、他は本殿のみの社や、石祠の神社が多かったようです。

明治期から、神社は国家の宗祀の場にふさわしいものに改変されて行きました。明治十六年までに、神社数は三一社から一九社に統廃合され、社地も平均二四三坪とこれまでの二倍近くに拡張されました。建物も、すべての神社が本殿と拝殿は備えるようになりました（幣殿併設神社は五社）。また、民衆の信仰対象とされてきた七谷郷などの中小・零細神社の祭神は、全国の神社同様に原則として、これまでとは無縁な皇祖神など天皇神話上の神々や、それに準ずるものへと転換されていきました。

（近現代部会 高橋雅弘）

	管理者	奉祭者	神社数
A	宮守	神主	14
B	宮守	寺院	9
C	宮守	山伏	1
D	寺院	寺院	1
E	寺院	神主	1
F	村	神主	5

合計 31 社

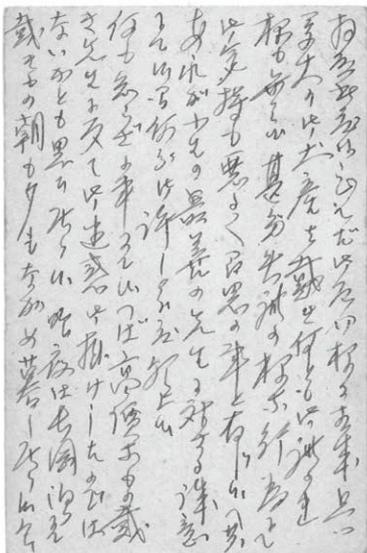
▲七谷の神社管理者と奉祭者

良寛書のコレクター 大湊吉平

昭和五十六年（一九八一）に加茂市へ、千葉県流山市の大湊ナヲ（一九〇一～八三）が良寛の遺墨二三点を含んだ美術・工芸品三二点と金銭（一億五千万円）を寄付しました。ナヲは昭和四十五年に没した夫（大湊吉平）と「加茂市の役に立つこと」と話しており、その遺志に沿ったとされています（『広報かも』昭和56・3・15）。ここでは吉平の残した手紙等から、彼の来歴やコレクションの形成過程に注目します。

吉平は明治三十年（一八九七）に陣ヶ峰で瓦製造業を営む大湊春吉・トア夫妻の次男として生まれました。大正六年（一九一七）二十歳の時に高田市（上越市）の第十三師団に入隊し、小千谷町（小千谷市）にあった工兵大隊に配属され、大正九年にはシベリアに従軍しました（陣ヶ峰大湊春一氏所蔵文書）。

その後、昭和八年には三条町（三条市）で養鶏業を営み（『新潟県年鑑 昭和八年度』）、昭和十八年に上京し不動産業で成功を収めました。



▲相馬御風宛て大湊吉平はがき
糸魚川歴史民俗資料館（相馬御風記念館）所蔵

吉平は発明好きで特許も多くもつほか、尺八を入隊後に持ち込むなど文事を好む風流人でした。彼はコレクションを良寛研究の第一人者である相馬御風の勧めで収集したといわれますが、吉平が御風の主宰する短歌の会の会員であったことが知り合うきっかけでした。二人の交流を示す資料が糸魚川歴史民俗資料館（相馬御風記念館）に残っています。

昭和十九年十月、吉平は御風を訪ねた際の礼を述べる葉書を出しました。また、その訪問時に吉平は御風に対して何かの支援をしたように、返礼として高価な品を譲り受けます。葉書中に「朝も夕も眺め暮らす」と書くほどに見応えのある品でした。もしかしたら加茂市に寄贈された品々のいづれかかもしれません。この葉書は二人の間柄が平凡な師弟の枠に留まらず、より親密な交流があったことを示唆しています。

（市史編さん室 平野 黎）